

3.2 河川に生息する生物の確認状況（河川の自然度・健全度）

ここでは河川に特有な環境に生育する群落の確認状況の整理等を行いました。なお、前回、前々回調査との比較は、調査の範囲や時期、回数などの条件が必ずしも同一ではありません。また、限られた季節や場所にしかみられない種もあることから、比較結果は同一河川での消長を示すものではなく、傾向を把握するための参考です。

【河川敷の変遷】

（植物調査）

● 17 河川中 14 河川で樹林化の傾向

植生図作成調査の結果もとに、河川敷を木本群落、草本群落、自然裸地、その他、開放水面の 5 つに区分し、河川敷の状況の変遷について整理しました。

今回とりまとめを行った 17 河川の平均では、河川敷は面積にしておよそ木本群落 22%、草本群落 21%、自然裸地 6%、その他 24%、開放水面 27%で占められていました。

前々回調査から今回調査にかけての変遷をみると、河川敷で木本群落の占める割合が増加する、樹林化の傾向がみられたのは、14 河川でした。（資料掲載：3-9～3-11ページ）

近年、河川敷において植生が著しく繁茂する樹林化の現象が進み、河川管理上の懸案事項となっている箇所が少なくありません。

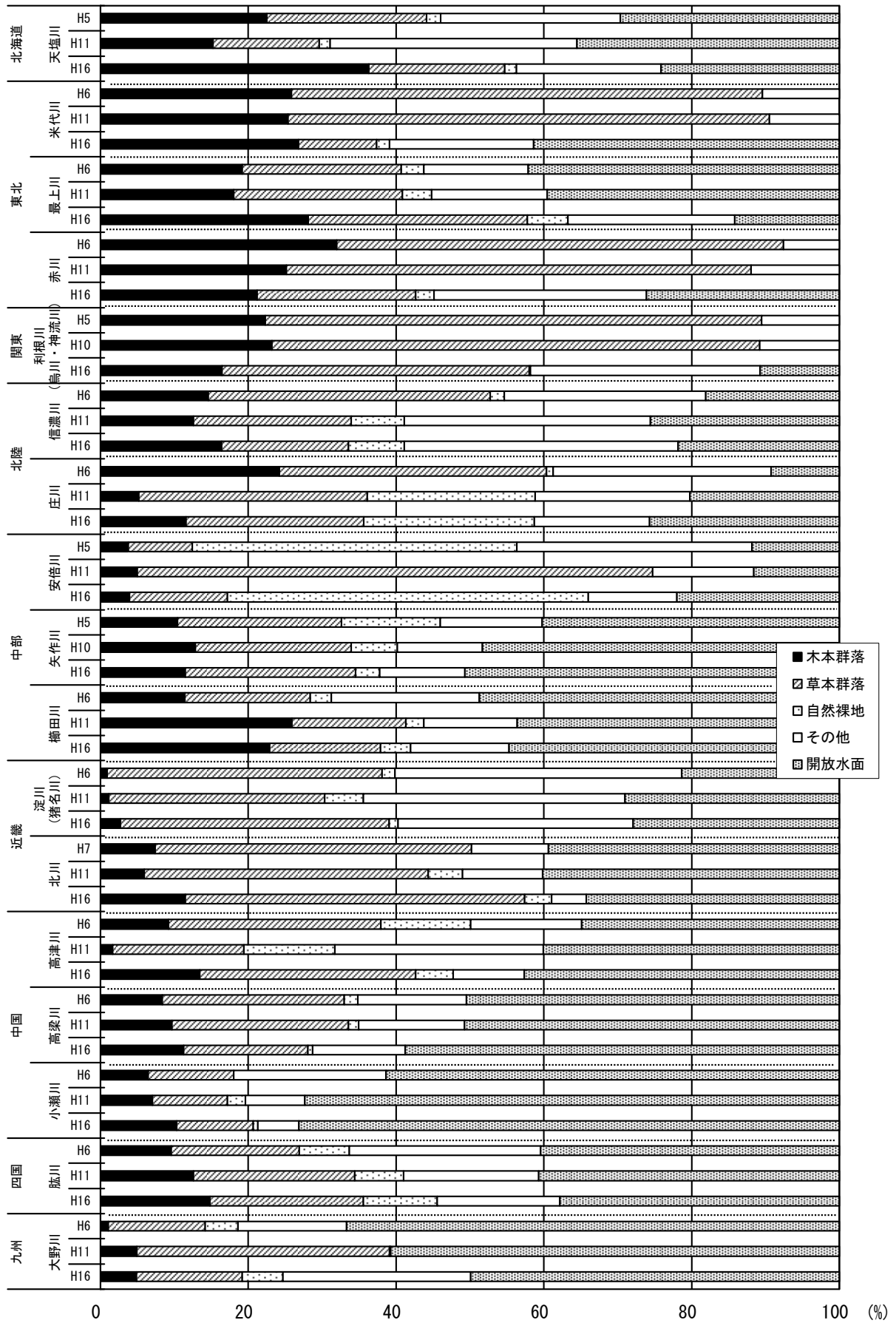
ここでは、植生図作成調査の結果をもとに、河川区域を木本群落、草本群落、自然裸地、その他（畑、水田、人工草地、人工裸地、公園・グラウンド等）、開放水面の 5 つに区分し、河川敷の状況の変遷について整理しました。

今回とりまとめを行った 17 河川の平均では、調査対象面積※はおよそ木本群落 22%、草本群落 21%、自然裸地 6%、その他 24%、開放水面 27%で占められていました。

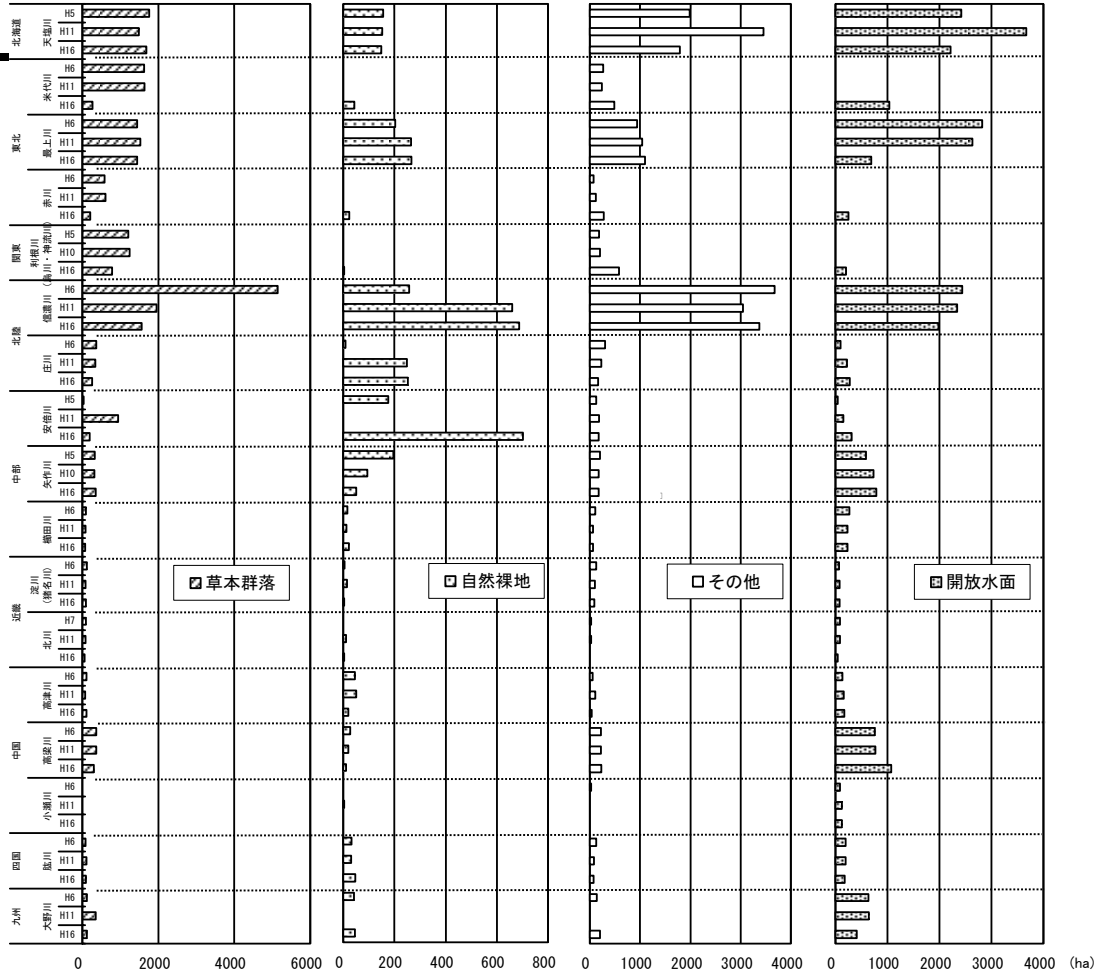
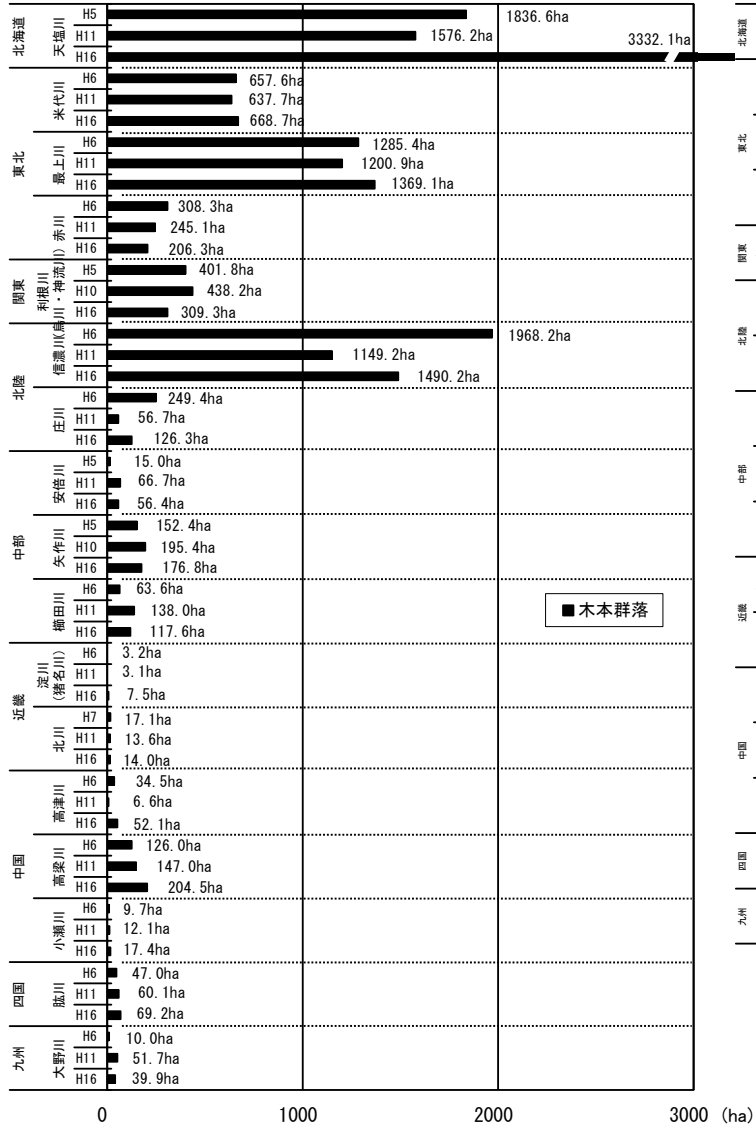
前々回調査から今回調査にかけての変遷をみると、木本群落の占める割合が増加する、樹林化の傾向がみられたのは、東北地方の赤川、関東地方の利根川（烏川・神流川）、北陸地方の庄川を除く 14 河川でした。

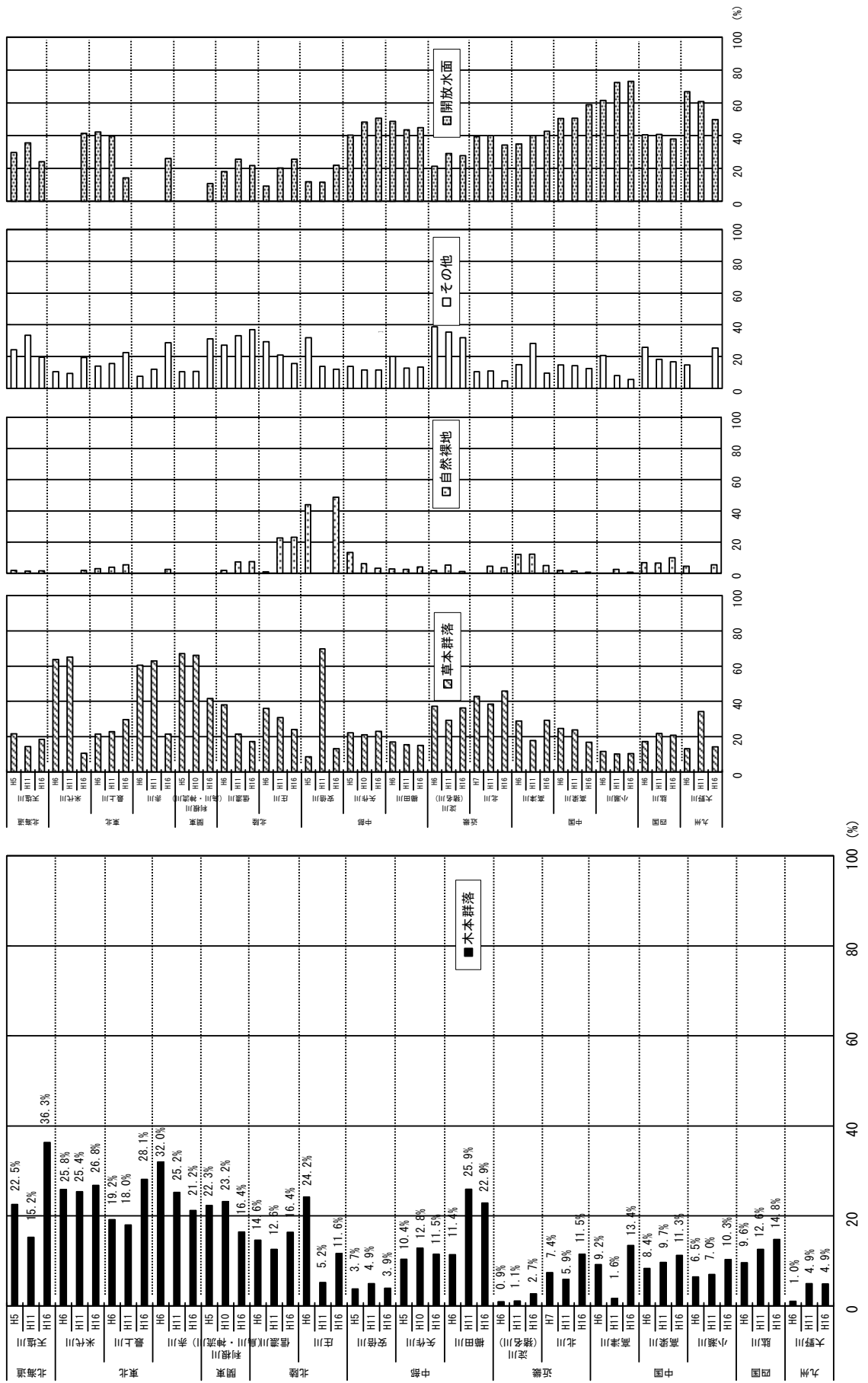
※:調査対象面積とは、植生図作成調査における調査対象範囲の面積を示す。なお、前々回調査から今回調査にかけての変遷をみるにあたり、一部、水系ごとに年度間でとりまとめ対象河川及びその範囲（距離）の調整を図っている。

※米代川（H6、H11）、赤川（H6、H11）、利根川（烏川・神流川）（H6、H11）には、開放水面の面積を示すデータがなかった。



河川敷の変遷 (調査対象面積に対する構成比)





● ヤナギなど自然樹林の構成比が 17 河川中 9 河川で増加傾向

河畔の自然樹林の指標となる、ヤナギ群落、ハンノキ群落、カワラハンノキ群落、ムクノキ-エノキ群集、ヤチダモ-ハルニレ群集の分布面積を整理しました。

今回とりまとめを行った 17 河川では、調査対象面積に対する構成比が最も高い値を示した河川は、北海道地方の天塩川で、23.0%でした。

前々回調査から今回調査にかけての変遷をみると、9 河川でこれらの構成比の増加傾向がみられました。
(資料掲載: 3-13、3-14ページ)

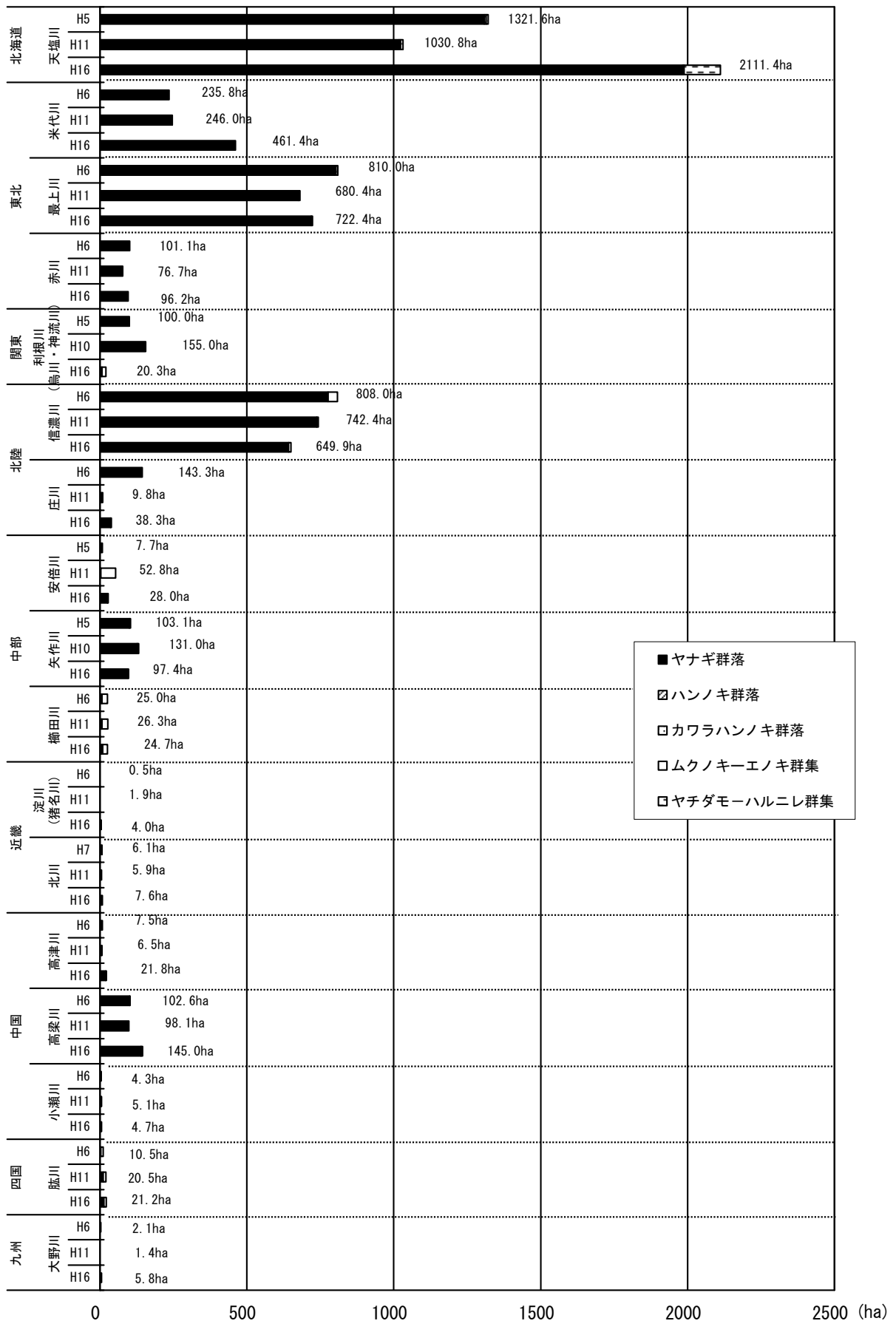
ヤナギ類、ハンノキ、カワラハンノキ、ムクノキ、エノキ、ヤチダモ、ハルニレは河畔の自然樹林の主要な構成種として知られています。ヤナギ類は本州を中心に、ハンノキは北海道から沖縄にかけて、カワラハンノキは東海から九州にかけて、ムクノキとエノキは本州以南に分布しています。また、ヤチダモは北海道と本州、ハルニレは北海道から九州にかけて分布しています。ヤナギ類はコムラサキの幼虫等、昆虫類の食草や鳥類の集団ねぐらとして、ムクノキは鳥類のねぐらの他、餌場や繁殖場所として利用されています。エノキはオオムラサキの幼虫等、昆虫類の食草として知られています。このように、これらの樹林は動物の生息環境として重要な要素の一つであると考えられます。

ここでは、河畔の自然樹林の指標として、ヤナギ群落（イヌコリヤナギ等の低木林からタチヤナギ群集等の高木林までを含む）、ハンノキ群落、カワラハンノキ群落、ムクノキ-エノキ群集、ヤチダモ-ハルニレ群集の分布面積を整理しました。

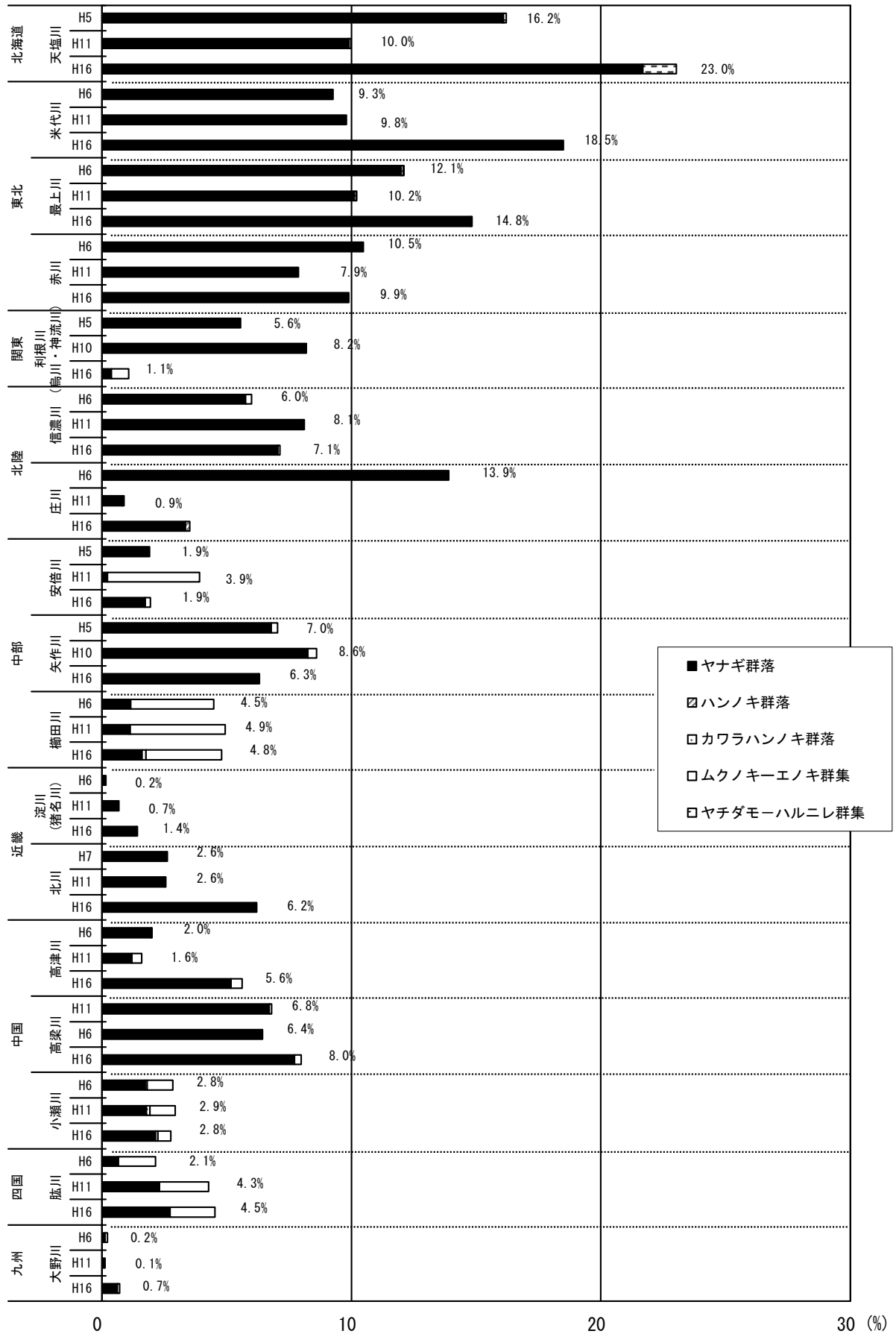
今回とりまとめを行った 17 河川の昨年度の調査結果によると、これらの群落のうち、ヤナギ群落が最も多くみられました。調査対象面積[※]に対する構成比が最も高い値を示した河川は、北海道地方の天塩川で、23.0%でした。最も低い値を示した河川は、九州地方の大野川で、0.7%でした。

前々回調査から今回調査にかけての変遷をみると、北海道地方の天塩川、東北地方の米代川と赤川、近畿地方の北川、中国地方の高津川と高梁川など 9 河川でこれらの構成比の増加傾向がみられました。

※:調査対象面積とは、植生図作成調査における調査対象範囲の面積を示す。なお、前々回調査から今回調査にかけての変遷をみるにあたり、一部、水系ごとに年度間でとりまとめ対象河川及びその範囲（距離）の調整を図っている。



自然樹林の分布面積の変遷 (面積)



自然樹林の分布面積の変遷 (調査対象面積に対する構成比)

● 砂礫河原に生育するカワラヨモギーカワラハハコ群落が増加傾向

砂礫河原の指標となる、カワラヨモギーカワラハハコ群落の分布面積を整理しました。今回とりまとめを行った 17 河川では、カワラヨモギーカワラハハコ群落は主に中部以北の 7 河川で見られました。

前々回調査から今回調査にかけての変遷をみると、中国地方の高梁川を除く 6 河川で、調査対象面積に対する構成比の減少傾向がみられました。(資料掲載: 3-16、3-17ページ)

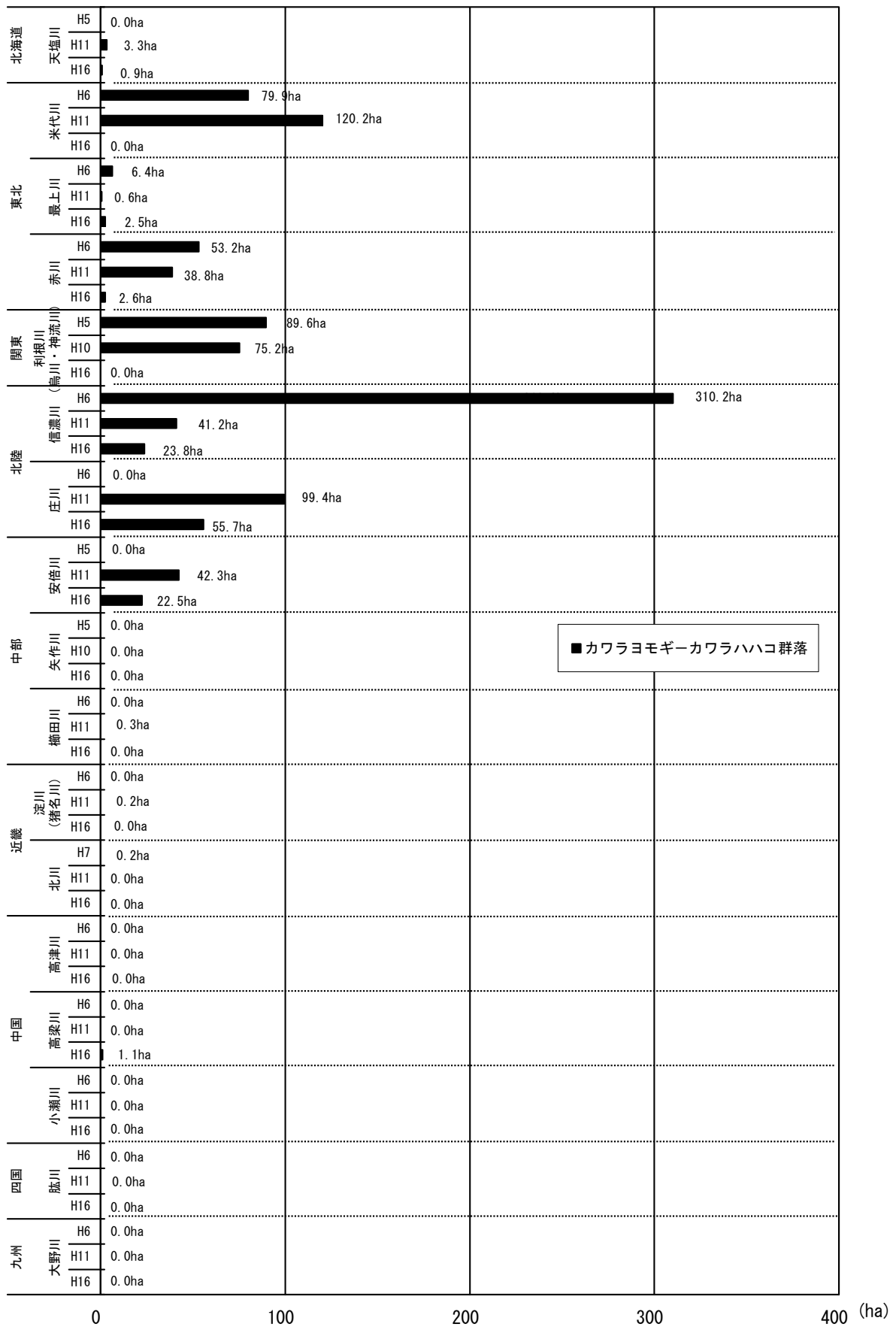
カワラヨモギとカワラハハコは砂礫のある河原に生育するキク科の多年草です。カワラヨモギは本州から沖縄にかけて分布し、カワラハハコは北海道から九州にかけて分布しています。どちらも平時は乾燥し、洪水時には冠水し攪乱を受ける場所に生育するのが特徴です。砂礫河原に生育する植物には、攪乱頻度の減少等により絶滅が危惧される種なども含まれるため、河川環境の特性を把握するための重要な要素の一つと考えられます。

ここでは、砂礫河原の指標となる、カワラヨモギーカワラハハコ群落の分布面積を整理しました。

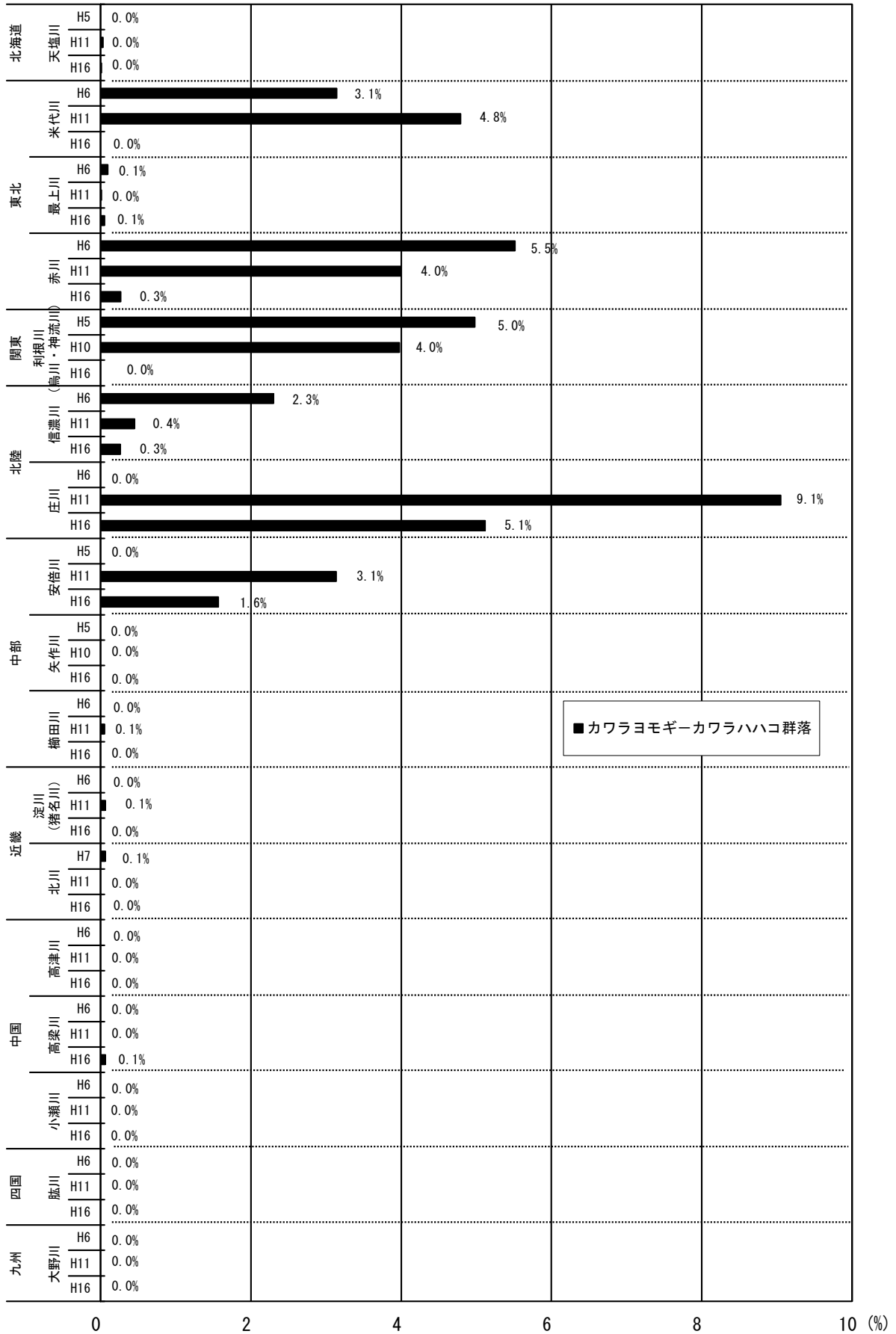
今回とりまとめを行った 17 河川では、カワラヨモギーカワラハハコ群落は主に中部以北の 7 河川で見られました。調査対象面積[※]に対する構成比が最も高い値を示した河川は、北陸地方の庄川で、5.1%でした。

前々回調査から今回調査にかけての変遷をみると、カワラヨモギーカワラハハコ群落が確認された 7 河川のうち、中国地方の高梁川を除く 6 河川において、構成比の減少傾向がみられました。なお、高梁川では今年度調査ではじめてカワラヨモギーカワラハハコ群落が確認されました。

※:調査対象面積とは、植生図作成調査における調査対象範囲の面積を示す。なお、前々回調査から今回調査にかけての変遷をみるにあたり、一部、水系ごとに年度間でとりまとめ対象河川及びその範囲(距離)の調整を図っている。



砂礫河原に生育する植物群落の分布面積の変遷 (面積)



砂礫河原に生育する植物群落の分布面積の変遷
(調査対象面積に対する構成比)

● 河口域の塩性湿地に生育するシオクグ群集、アイアシ群集が減少傾向

河口域の塩性湿地の指標となる、シオクグ群集、アイアシ群集の分布面積を整理しました。

今回とりまとめを行った 17 河川のうち、シオクグ群集、アイアシ群集が確認された河川は、中部地方の櫛田川、近畿地方の北川、四国地方の肱川、九州地方の大野川の 4 河川でした。

前々回調査から今回調査にかけての変遷をみると、これら 4 河川全てにおいて、調査対象面積に対する構成比の減少傾向がみられました。(資料掲載: 3-19、3-20ページ)

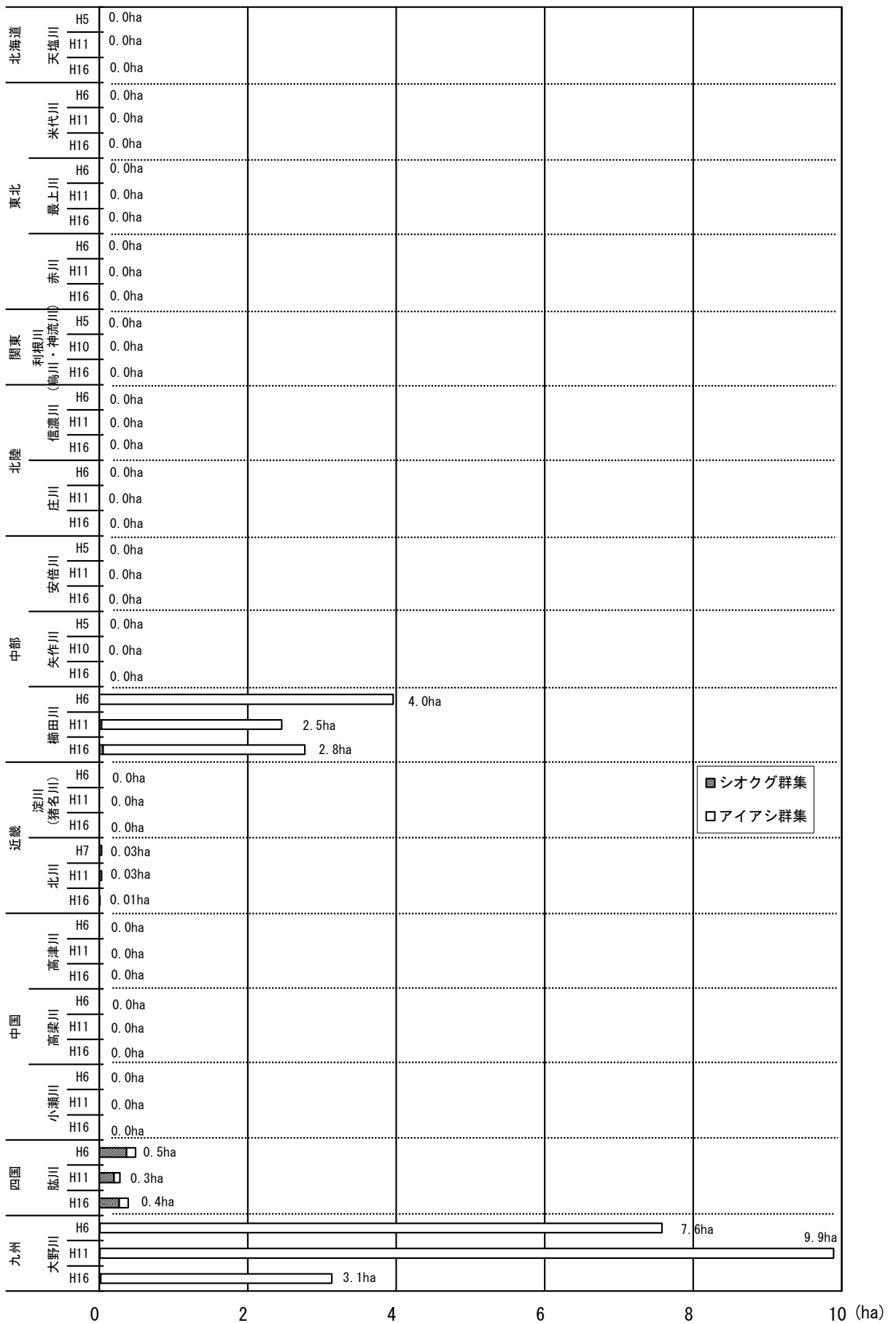
シオクグ(カヤツリグサ科)とアイアシ(イネ科)は、河口干潟や塩性湿地に生育する多年草です。シオクグは北海道から沖縄にかけて分布し、北海道から九州にかけて分布しています。このような塩性湿地に生育する植物群落は、河口域の汽水環境を把握するための重要な要素の一つであると考えられます。

ここでは、河口域の塩性湿地の指標となる、シオクグ群集、アイアシ群集の分布面積を整理しました。

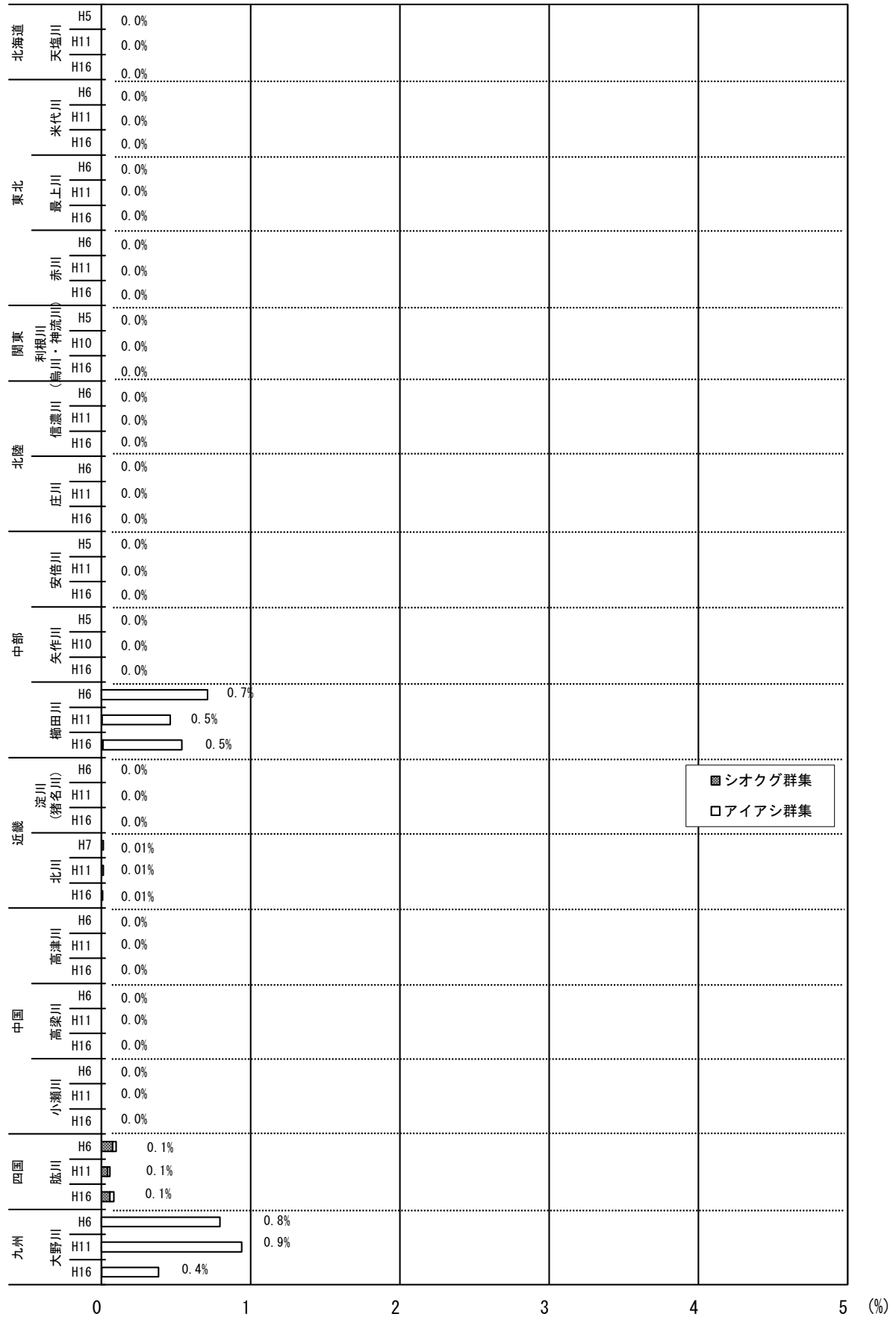
今回とりまとめを行った 17 河川のうち、シオクグ群集、アイアシ群集が確認された河川は、中部地方の櫛田川、近畿地方の北川、四国地方の肱川、九州地方の大野川の 4 河川でした。このうち、調査対象面積[※]に対する構成比が最も高い値を示した河川は、中部地方の櫛田川で、0.5%でした。

前々回調査から今回調査にかけての変遷をみると、シオクグ群集、アイアシ群集が確認された 4 河川全てにおいて、これらの構成比の減少傾向がみられました。

※:調査対象面積とは、植生図作成調査における調査対象範囲の面積を示す。なお、前々回調査から今回調査にかけての変遷をみるにあたり、一部、水系ごとに年度間でとりまとめ対象河川及びその範囲(距離)の調整を図っている。



河口域の塩性湿地に生育する植物群落の分布面積の変遷 (面積)



河口域の塩性湿地に生育する植物群落の分布面積の変遷
(調査対象面積に対する構成比)

● 水辺の植物群落が最上川など 8 河川で増加傾向、米代川など 9 河川で減少傾向

水辺の植物群落の指標として、ヨシ群落、オギ群落、ツルヨシ群集の分布面積を整理しました。

今回とりまとめを行った 17 河川では、調査対象面積に対する構成比が最も高い値を示した河川は、近畿地方の北川で、約 24.6%でした。最も低い値を示した河川は、礫が多い河川として知られる中部地方の安倍川で、約 1.7%でした。

前々回調査から今回調査にかけての変遷をみると、北陸地方の最上川など 8 河川でこれらの構成比の増加傾向がみられました。また、東北地方の米代川など 9 河川で減少傾向がみられました。

(資料掲載: 3-22、3-23ページ)

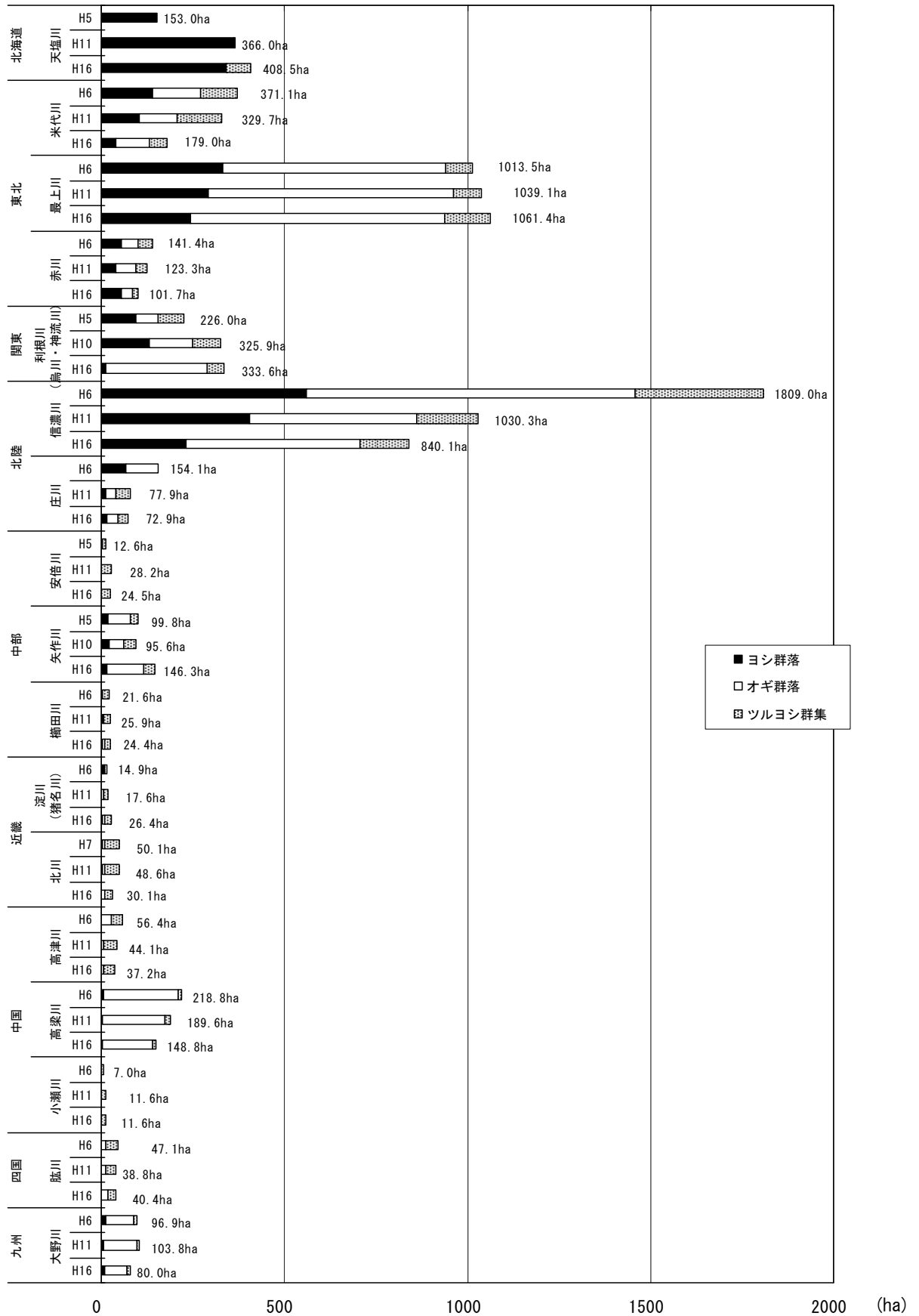
ヨシ、オギ、ツルヨシは、比較的地下水位の高い場所に生育し、河川区域で広くみられるイネ科の多年草です。ヨシとオギは水辺の湿地などに生育し、ツルヨシは川岸や砂礫地などに生育します。ヨシとツルヨシは北海道から沖縄にかけて、オギは北海道から九州にかけて分布しています。このような水辺の植物群落は、河川景観を特徴づける他、昆虫類の食草となったり、オオヨシキリなどの鳥類やカヤネズミの営巣の場として利用されるなど、水辺の動物の生息環境として重要な要素の一つであると考えられます。

ここでは、水辺の植物群落の指標として、ヨシ群落、オギ群落、ツルヨシ群集の分布面積を整理しました。

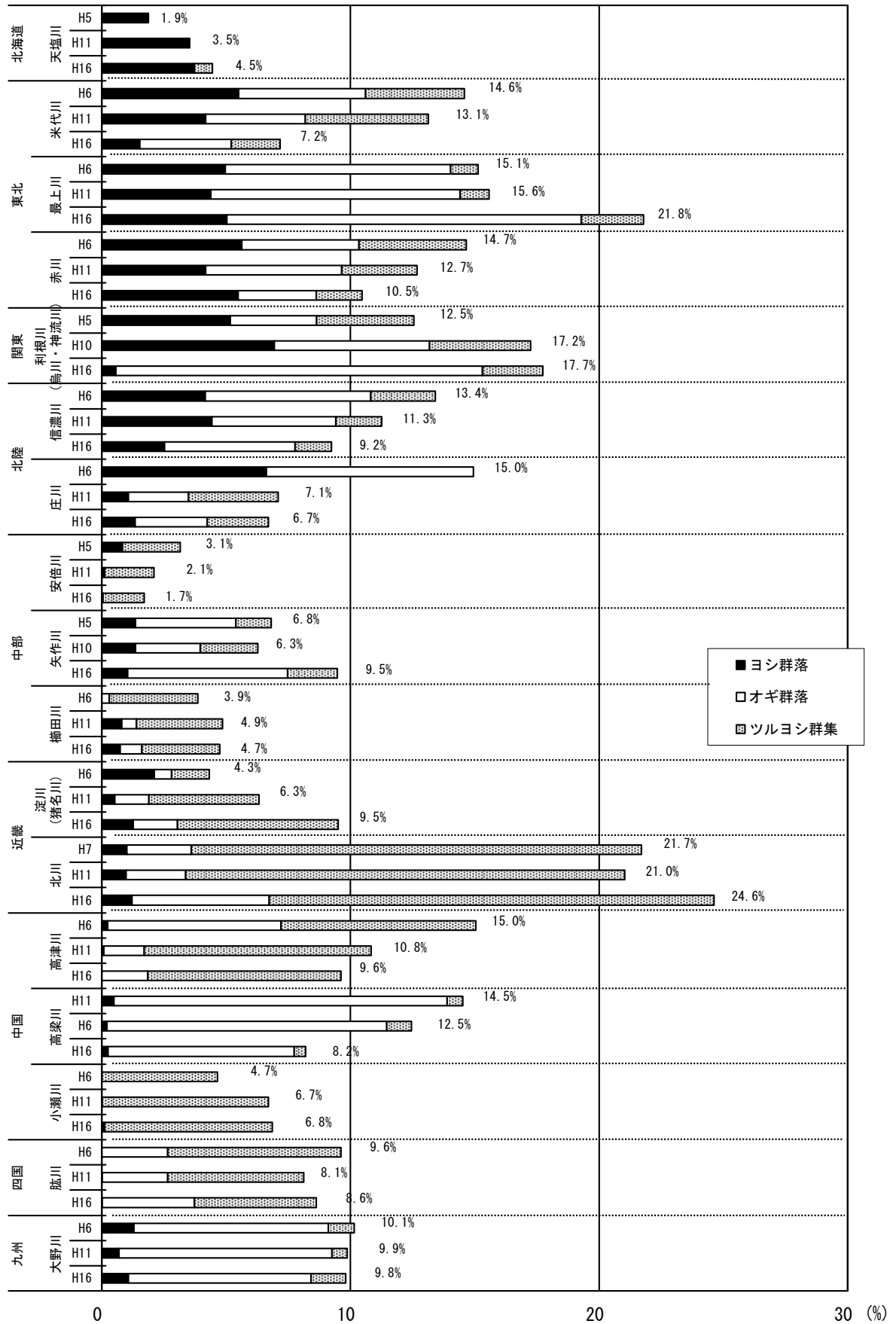
今回とりまとめを行った 17 河川では、ヨシ群落は北海道地方から北陸地方にかけて多く、ツルヨシ群集は近畿地方から四国地方にかけて多くみられました。調査対象面積[※]に対する構成比が最も高い値を示した河川は、近畿地方の北川で、約 24.6%でした。最も低い値を示した河川は、礫が多い河川として知られる中部地方の安倍川で、約 1.7%でした。

前々回調査から今回調査にかけての変遷をみると、東北地方の最上川、関東地方の利根川（烏川・神流川）、近畿地方の淀川（猪名川）など 8 河川でこれらの構成比の増加傾向がみられました。また、東北地方の米代川、北陸地方の庄川、中国地方の高津川と高梁川など 9 河川では減少傾向がみられました。

※:調査対象面積とは、植生図作成調査における調査対象範囲の面積を示す。なお、前々回調査から今回調査にかけての変遷をみるにあたり、一部、水系ごとに年度間でとりまとめ対象河川及びその範囲（距離）の調整を図っている。



水辺の植物群落の分布面積の変遷 (面積)



水辺の植物群落の分布面積の変遷
(調査対象面積に対する構成比)